

8 近接性

言語に普遍的に認められる特性の一つとして**類像性 (iconicity)**が挙げられ、特に認知言語学や機能言語学において重要視されてきた。類像性とは、言語記号と指示対象が（少なくとも一定程度）何らかの関連性を持つことを指す。ここでは英語の例を挙げ、類像性の下位範疇の一つに分類される**近接性 (proximity)**に焦点を当てて論ずる（隣接性 (contiguity) と呼ばれることがあるが、ここでは近接性を採用する。類像性の詳細な分類は、Haiman (1980), Haspelmath (2008), 森・高橋編 (2013), 池上・山梨編 (2020) を参照）。

近接性とは「語と語の間の物理的な遠近は、語と語の意味的な結びつきの遠近と対応する」ことであり、これは**近接性の原則 (proximity principle)**と呼ばれている (cf. Givon (1990: 970))。そしてこの原則は、様々な文法構造で観察されると考えられてきた。例えば (1) は、いわゆる動能交替 (conative alternation) と呼ばれる現象である。

- (1) a. John shot the tiger. (他動詞構文)
b. John shot at the tiger. (動能構文 (conative construction))
- いずれも「ジョンは虎を撃った」という中核的な意味に関しては共通しているが、銃弾が虎に当たったかどうかについての含意は異なる。(1a) では、直接目的語である the tiger が動詞 shot と近接しており、この近接性は意味にも反映され、銃弾は虎に命中したことが含意される。一方 (1b) では、shot と the tiger の間に at が介入することにより近接性が担保されず、動詞の表わす事態の影響が the tiger まで及んだかどうかが不明になるため、命中したことまでは含意されないと解釈される。

上記のような対象への動作の影響性に加え、対象への関与の度合いにも近接性の原則が確認できる。

- (2) a. John knows Mary.
b. John knows of Mary.
- (2a) の場合、動詞と目的語が近接しているため、John は Mary を「(直接的に) よく知っている」と解釈される。一方 (2b) では、of が介在することにより直接性が失われ「(間接的に) 顔や名前ぐらいは知っている」という意味になる。

また、動詞と補部の近接性が、事態に対する認識の直接性に対応しているケースも見られる。

- (3) a. John found Mary (to be) irritating.
b. John found that Mary was irritating.

(3a) では、補部の Mary (to be) irritating が動詞 found に直結しており、メアリが気に障る存在であることが直接経験として認識しているという含意がある。これに対し (3b) は、補部 that 節が独立しており、他人からの伝聞などによって間接的にメアリが気に障る存在であると認識したことが含意される。

that 節補部を取る他の文法構造でも、(3) と類似した現象が確認できる。

- (4) a. John asked Mary to sing.
- b. John asked that Mary sing.

(4a) は asked + O + to 不定詞の文構造において、補部である Mary to sing が動詞に近接しており、そのためメアリに対して直接的で強い依頼がなされたと解釈される。具体的には、面と向かって自らが直接依頼を行ったというような意味合いである。他方 (4b) では、(3b) 同様に that 節が用いられることで動詞の表わす行為の直接性が減少するため、例えば、第三者を介して間接的に依頼をしたというような含意を読み取ることができる。

ここまで、近接性の原則によって文法構造における形式と意味の対応関係が説明できることを見てきた。最後に、この原則はあくまでも原則であり厳格な規則ではないことを示唆する現象についても付言しておきたい。一例として、二重目的語構文 (double object construction) と to を用いた与格構文を挙げて検討してみる。

- (5) a. John gave Mary a book. (二重目的語構文)
- b. John gave a book to Mary. (与格構文)

(5a) のような二重目的語構文では、動詞と（間接）目的語が近接している。このため目的語は動詞の表わす行為の影響を直接的に受けることによって「所有/受領」の意味が付随し、to を用いて書き換えられた (5b) では、動詞と行為を受ける対象間の近接性が担保されないため、そのような含意はないと分析してきた。しかし Rappaport Hovav and Levin (2008) では、動詞の種類によって両構文が異なる意味を持つ場合もあれば、同じ意味になる場合があるという分析が提案されている。例えば give のような動詞は、二重目的語構文であろうと与格構文であろうと意味は変わらず、いずれも所有の意味を有するとされている（詳細は Rappaport Hovav and Levin (2008) を参照）。

（川崎 修一）